

能界展望(平成二十一年)

山中, 玲子 / YAMANAKA, Reiko / Eguchi, Fumie / 江口, 文恵

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute
of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 / 能楽研究

(巻 / Volume)

35

(開始ページ / Start Page)

137

(終了ページ / End Page)

146

(発行年 / Year)

2011-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008656>

能界展望（平成二十一年）

江口文恵・山中玲子

はじめに

平成二十一年（二〇〇九）は、歴史地理学者吉田東伍が明治四十二年（一九〇九）に『能楽古典世阿弥十六部集』（能楽会）を刊行してから百年ということで、それを記念しての展示、学会の企画や演能の催し、雑誌の特集などが目立った。

吉田が一年前の明治四十一年に当該の世阿弥能楽論書を雑誌『能楽』に発表していたこともあり、前年の平成二十年から百年を祝う催しが散見していたが、本年になって本格化したと言ってもよからう。平成十二年の「花伝」六百年記念や前年の『源氏物語』千年紀ほどの規模ではなかったが、吉田東伍の学恩にふさわしい、骨太な企画が多かった。

近年の世界的金融危機に伴う不況の余波は、この業界と全く無縁であるとは言い難い。特に舞台制作にとつてはかなり厳しい時期を迎えている。これはすべてのジャンルに共通することであり、能界においても例外ではあるまい。現在でも能の催し物は多く、他分野とのコラボレーションもさかんになっている。能楽堂へ行けばいい舞台に出会うこともあるし、

満員の公演も目にはする。しかし、素人弟子に動員を支えてもらう状況は、稽古人口の減少とともに限界が近づいている。公演に連動した講座などの開催で新規の観客を増やそうとするほか、公演の宣伝やチケット販売においてインターネット利用など新しい媒体を利用する方法も定着しつつある。そのほか、観世会定期能がキリ番のみを安価に鑑賞できるハッピーアワーチケットを導入するなど、金額設定や販売方法を見直すところも出てきた。以上のような努力や試みがどう実を結ぶのであろうか。いい舞台を作ることも無論大事であるが、これからはよりいっそうの企業努力ならぬ、「主催者努力」が求められる時代なのかもしれない。

例年同様、すべての催しをとり上げることができていない。また、敬称を一部省略させていただいた。ご容赦願いたい。なお、以下の展望記事は、「さまざまな催し」全体を江口が、「榮譽・受賞」以降を山中が分担している。（江口文恵）

さまざまな催し

【記念能】

◎グランシップ開館十周年

静岡県立コンベンションセンター・グランシップが十周年を迎え、それを記念しての催し。2月28日「雛の宴―五人囃子のおひなさま―」（交流ホール）には観世喜正・大倉源次郎・亀井広忠ほかが出演。雅楽と能楽の公演。3月7日には「グランシップ静岡能」（中ホール・大地）が催された。演目は（望月）観世清和、（蝸牛）野村萬斎。

◎観世九臈会百周年

観世九臈会は、前年の平成二十年から百周年記念として三年にわたり記念公演を行っている。同会百周年の詳細は前号の能界展望に詳しいので、そちらを参照されたい。本稿では当年分の主な催しを列記しておく。4月26日。国立能楽堂。（撰待）長山禮三郎、（千鳥）野村萬、（道成寺）桑田貴志ほか。7月26日。矢来能楽堂。（熊野 村雨留）佐久間二郎、（財宝）大藏彌太郎、（天鼓 弄鼓之舞）坂真太郎ほか。9月19日。大槻能楽堂。（鸚鵡小町 杖三段之舞）長山禮三郎、（鐘の音）善竹忠一郎、（菊慈童 遊舞之楽）観世喜之ほか。10月3日。名古屋能楽堂。（狸々乱 双之舞）観世喜之・観世喜正、（鐘の音）佐藤友彦、（道成寺 赤頭）中所宜夫ほか。10月18日。矢来能楽堂。（松風 遠藤和久、（禰宜山伏）山本東次郎、能（郡 郡）古川充ほか。なお、雑誌「観世」3月号に観世喜之・観

世喜正親子のインタビュー「観世九臈会百周年を迎えて」が載る。

◎京都新能60回記念

6月1日・2日。平安神宮。昭和25年に開始された京都新能の60回記念公演。1日は（翁）井上裕久、（絵馬）河村和重、（杜若 恋之舞）橋本雅夫、（福の神）茂山千作、（正尊）豊嶋三千春。2日は（翁 神楽式）金剛永護、（花月）浦田保浩、（羽衣 盤渉）松野恭憲、（釣針）茂山千五郎、（紅葉狩 鬼揃）分林道治・古橋正邦。12月27日には、金剛能楽堂で60回を祝賀しての乱能が催された。（翁）茂山七五三、（絵馬）林光壽、（安宅）茂山あきら、（一角仙人）前川光長ほか。

◎第30回記念名古屋金春会特別公演

11月1日。名古屋能楽堂。（橋弁慶）金春穂高、（竹生鳥參）野村小三郎、（百万）本田光洋、（乱）鬼頭尚久。

◎世阿弥伝書発見・刊行百周年記念能

12月12日。大江能楽堂。（通盛）味方健ほか。吉田東伍「世阿弥十六部集」刊行百年を記念しての催し。

【復曲・新作など】

復曲及び新作の近年の傾向として、その作品のゆかりの地で公演を行うケースが多くなっている。どうしても首都圏及び関西に偏りがちな能の興行にとっては、新作・復曲の地方公演が充実しているのは喜ばしいことである。前年の「源氏物語」千年紀の影響もあり、『源氏物語』をもとに作られた

新作能も散見する。それも含めて、新作能・新作狂言の再演・再々演や、シリーズ化された上演などが目につく。新作を一回きりのものにせず、続けていくことで根付かせようという意気込みが感じられる。また、能以外の楽器や音楽を取り入れるなど、別ジャンルとのコラボレーションも目立つ。いっぽう、復曲に関しては以前に比べると上演頻度が多くなり多くないようだが、関連する企画が雑誌などで取り上げられたり、展示や当該曲についての論文が目立ち、能界の活性化にはつながっている。以下に主なものを挙げておく。

◎新作狂言〈歌ほめ〉〈かけとり〉ほか。

1月14日。パルコ劇場。HANAGATA in Parco公演。〈歌ほめ〉は帆足正規作で出演は茂山茂・茂山宗彦。〈かけとり〉は茂山逸平作で同名の落語をもとにしたもの。出演は茂山逸平・茂山茂・茂山童司・丸山やすし。ほかに木下順二原作の人形劇をもとにした〈木竜うるし〉、前年に沖繩で初演されたわかぎあふ作〈わちやわちや〉なども上演された。

◎新作能〈赦〉

2月22日。ルテアトル銀座。前年から続く日仏交流150周年記念・源氏物語千年紀公演の三公演目。六条御息所をシテとした新作能。出演は梅若玄祥・角当直隆・村瀬堤・松田弘之・吉坂一郎・原岡一之ほか。

◎新作能〈河勝〉

2月22日。NHKホール。9月21日。縄文ロマンパーク。ふくい若狭薪能。出演は大槻文蔵・梅若玄祥ほか。前年初演の

作品で世阿弥伝書にもその名が見える秦河勝伝説をもとに作られたもの。

◎新作能〈狐狗狸断〉

3月20日。茨木市市民総合センター。春来る狂言。京極夏彦原作の狂言。出演は茂山逸平・茂山茂。

◎復曲能〈墨染櫻〉

3月29日。宝生能楽堂。塩津哲生の会特別公演。塩津哲生節付・監修。村上湛演出・補綴。田草川みずき能本校訂。出演は塩津哲生・宝生欣哉・高澤祐介・松田弘之・曾和正博・亀井忠雄・観世元伯ほか。なお、『能楽タイムズ』5月号に村上湛氏の報告「完曲〈墨染櫻〉復興報告」が載る。

◎新作能〈蛭〉

4月5日。椿山荘。目白シンラート2009〜椿山篝火舞台〜第三夜。桜間右陣作。出演は桜間右陣・森常好・松田弘之・大倉源次郎・亀井広忠・金春國和ほか。

◎能〈リア王〉再々演

4月29日。紀尾井ホール。平成19年10月に初演されたシェイクスピア作品からの翻案作品の再々演。上田邦義作。出演は足立禮子・遠藤喜久・遠藤博義・新井麻衣子・寺井久八郎・古賀裕己・上條芳暉・徳田宗久ほか。

◎新作狂言〈二文酒〉〈お用の尼〉

5月10日。名古屋能楽堂。第51回「鳳の会」佐藤友彦舞台生活六十周年記念。ともに佐藤友彦作。出演は井上靖浩・今枝郁雄・井上菊次郎・佐藤友彦。

◎新作能(オンデイス)

6月14日。セルリアンタワー能楽堂。7月26日。奈良県新公会堂。モット・フーケーの原作を能に翻案したもの。本間生夫作、梅若猶彦演出、観世鏡之丞監修。出演は梅若猶彦・梅若義久・三宅近成・大村滋二・幸正昭・藤田次郎・上田悟ほか。

◎新作能(沖縄残月記)

6月20日。セルリアンタワー能楽堂。「琉球舞踊と能の舞ー祝い」と思い／新作能「沖縄残月記」。多田富雄作。清水寛二節付・演出。(原爆忌(長崎の聖母)に続く第二次世界大戦を主題にした多田富雄の新作能の三作目。能の囃子のほかに琉球楽器三線も加えた。出演は清水寛二・伊藤嘉章・伊藤嘉寿・志田房子・志田真木・松田弘之・古賀裕己・柿原弘和ほか。

◎新作能(兼統)再演

一年前の平成二十年に初演された(兼統)は同年放送されたNHK大河ドラマの主人公直江兼統に関する新作能で新潟県内を中心に再演が続いている。6月20日、碧水園能楽堂、シテ小島英明。7月14日、秋保温泉佐勘、シテ観世喜正。7月28日、六日町小学校校庭、シテ寺井榮。10月9日、昭和公園陸上競技場、シテ観世喜正。10月25日、上越文化会館、シテ観世喜正。12月15日、新潟市民芸術文化会館劇場、シテ観世喜正。

◎新作能(舟維盛)

8月15日。横浜能楽堂。「平家物語の世界」。平維盛入水譚をもとにした新作能。出演は櫻間右陣・森常好・松田弘之・大倉源次郎・亀井広忠ほか。

◎新作能(空海)

10月10日。宗像ユリックスイベントホール特設舞台。出演は梅若玄祥・梅若晋矢・則久英志・松田弘之・飯田清一・白坂信行・田中達ほか。

◎新作狂言(老人木)

10月18日。宝塚ソリオホール。手塚治虫記念館開館十五周年記念公演。漫画『ブラック・ジャック』をもとにした新作能。出演は善竹隆司・善竹隆平。

◎復曲(丹後物狂)

10月24日。智恩寺。井阿弥原作に世阿弥が手を入れた世阿弥時代の人気曲を、作品ゆかりの地である天橋立の智恩寺で上演。出演は観世清和・観世三郎太・福王和幸・山本東次郎・杉信太郎・鶴沢洋太郎・亀井広忠ほか。なお、関連企画として9月19日(10月25日)に上演記念企画展「世阿弥の時代(義満をめぐる芸能と丹後)」(京都府立丹後郷土資料館)、9月24日にシンポジウム「天橋立と室町文化(義満と世阿弥の旅)」(相国寺承天閣美術館)、10月3・4日には京都府立丹後郷土資料館で文化財講座、10月23日に「丹後物狂」を十倍楽しむ講演会(智恩寺方丈・みやづ歴史の館)などが催されたほか、雑誌『観世』が10(12月号)で特集企画を組んだ。

◎新作能(水の輪)

141 能界展望(平成21年)

10月12日。「川の駅」はちけんや特設水上舞台。「水都大阪2009」。山本章弘作。水質汚染と再生をテーマにした新作能。出演は山本章弘・山本麗晃・浦田保浩ほか。一般公募の子供たちも参加。12月26日には大阪中央公会堂で再演。

◎新作狂言(はらべ山)

11月28日。国立能楽堂。国立能楽堂企画公演。文化庁芸術祭主催。平成11年初演の帆足正規作、茂山千之丞演出の新作狂言。出演は茂山千之丞・茂山正邦・茂山茂・茂山逸平ほか。

◎創作狂言(オトタチバナヒメ)

12月5日。青葉の森公園芸術文化ホール。房総発見伝言狂言。日本武尊の后弟橘媛を主人公にした作品。出演は小笠原匡・野村万緑ほか。

◎復曲狂言(東西迷)

12月12日。杉並能楽堂。「東西迷」を観る会。和泉流のみの所演曲を大蔵流で復曲。出演は山本東次郎。

【海外との交流・海外公演など】

◎ルーマニア・オーストリア能楽公演

2月6日～11日。国際交流基金の主催事業。ルーマニアのブカレスト国立劇場、オーストリアのウィーン Tanzquartier Wien HalleGで(葵上 梓之出(伯母ヶ酒)の公演。出演は武田志房・山階彌右衛門・関根祥人・善竹隆司・善竹隆平ほか。

◎喜多流大島家が北欧公演

5月11日～20日。国際交流基金主催事業。フィンランド・ヘ

ルシンキのアレキサンドラ劇場、スウェーデン・ストックホルムのスードラ劇場で(羽衣(天鼓)ほかの公演。出演は大島政允・大島輝久・大島衣恵・出雲康雅ほか。

◎ポーランドで能面・能装束展

5月14日～8月31日。ポーランド・クラクフの日本美術技術センター。開館15周年記念展示「幽玄の世界展」。能面百二十点、能装束十五点などを展示。同国初の能面展。

◎野村万作北京公演

5月15日。長安大戲院。中国芸術研究院からの名誉教授号授与を記念しての公演。(三番叟(棒縛(茸)。出演は野村万作・野村萬斎・石田幸雄ほか。同月14日には北京大学で狂言ワークショップを行う。

【講座・展覧会など】

◎東京文化財研究所がパネル展示開催

3月より東京文化財研究所が1階ロビー・エントランスにおいて展示「X線透過撮影による能管・龍笛の構造解明」を開始。能管の構造・制作方法の違いなどを解説。

◎早稲田大学演劇博物館「世阿弥発見100年」吉田東伍と能楽研究の歩み―展―

3月1日～25日。「世阿弥十六部集」刊行から百年を記念して、校訂者吉田東伍の自筆原稿をはじめとする関連資料や写真、世阿弥伝書を展示。

◎能楽学会大会

3月21・22日に開催された能楽学会大会も大会企画のテーマとして「世阿弥発見百年―吉田東伍の人と学問―」を掲げ、演劇博物館の展示とリンクして行われた。21日には表章・竹本幹夫・千田稔の講演が行われ、22日の研究発表でも世阿弥や世阿弥伝書に関する発表が数本あった。

◎松柏美術館企画展「幽玄の美を追い求め―松園・松篁の芸術館を育てた能楽―」

4月2日〜5月31日。上村松園の「草紙洗小町」「砧」などを題材とした作品や金剛宗家所蔵の面・装束などを展示。

◎武蔵野大学能楽資料センター公開講座「仏教と能」

①7月2日石井倫子「能に描かれた仏教」②7月23日竹本幹夫「西本願寺と能」③10月1日宝生閑・西哲生「僧に扮する―ワキ方芸談」④10月29日三浦裕子「音楽」に見る能と仏教

◎早稲田大学演劇博物館「『鷹の井戸』を廻る輪舞曲―フェノロサと能』展

9月25日〜10月16日。日本フェノロサ学会第三十回年次大会記念特別展示。フェノロサの能に関する研究メモ、原稿及びイエイツ作『鷹の井戸』を翻案した新作能『鷹姫』で使用された面などが展示された。9月26日には同学会記念講演会「フェノロサと能」が行われた。講師は神林恒道・竹本幹夫。

◎東京大学駒場博物館展覧会「観世家のアーカイブ―世阿弥直筆本と能楽テクストの世界―

料のインターネット公開を記念しての展覧会。世阿弥直筆本や能楽伝書をはじめとする文書資料や能装束を展示。期間中に二回の講演会と六回のギャラリートークを行う。また、プレイイベントとして10月9日に東京大学駒場キャンパス中庭で新能が催された。

◎第十四回法政大学能楽セミナー「弘化勸進能絵巻の世界―江戸時代の都市と能楽―」

①10月5日宮本圭造「『弘化勸進能絵巻』が描くもの―江戸の勸進能に集う人々―」②10月15日山中玲子「勸進能の舞台の上―人々はどんな能を観たのか―」③10月23日原田信男「棧敷と盛り場の食文化―アジアのなかの江戸食文化―」④10月26日高村雅彦「劇場の宇宙―建築から見た弘化勸進能とアジアの戯台―」⑤10月29日表章「江戸の勸進能―その歴史と変遷―」

◎国文学研究資料館連続講演「表氏八十以後能楽談儀―能楽研究百年史の争点を洗う―」

表章氏による全5回の講演①10月26日「『花伝』成立論と世子用字法探索と―世阿弥能楽論研究の進展と課題―」②11月9日「作者研究と作品研究の流れ―小段理論・古注・作品史など―」③11月30日「観世信光と金春禅鳳―室町後期の新しい動き―」④12月7日「徳川綱吉・家宣の功罪―大混乱の中の新傾向―」⑤12月21日「座」「流」と「大夫」「家元」―能楽史研究の動向と展望―。なお、同館では講座開催期間中の12月7日〜25日に能楽資料展が催され、館蔵・個人蔵の

能楽資料が展示された。

荣誉・受賞

◎文化庁芸術祭賞(平成二〇年度)

大賞 狂言方大藏流 茂山千五郎(茂山狂言会、三世千作二十三回忌追善における狂言「通圓」の演技に対して)。

優秀賞 横浜能楽堂(特別企画公演「武家の狂言、町衆の狂言」の成果に対して)。

新人賞 シテ方観世流 上田拓司(第十四回照の会における能「江口」半能「石橋・大獅子」の演技に対して)。

◎日本芸術院賞(平成二〇年度)

シテ方観世流 観世鏡之丞

推薦理由…幼少より伯父観世寿夫及び父八世観世鏡之丞のもとで研鑽を積み、伯父の知的視点に基づく古典の正統的継承と端正な芸風を範に、父の華麗優美な芸風を併せ持つ能楽師として高い評価を得ており、近年の鏡仙会所演(野宮)を始めとする舞台成果に大器の片鱗を見せた。新作能への新しい仕事にも意欲的に取り組む、海外公演にも積極的で、一演者としてのみならず有数の演能集団、鏡仙会の棟梁として、更にはまた能楽界将来のリーダーとして属目の逸材と認めるに異論なきところである。

観世氏は昭和31年、八世観世鏡之丞静雪の長男として生ま

れ、伯父観世寿夫及び父に師事。35年、四歳で初舞台。39年(岩舟)で初シテ。46年(鷲)49年(石橋)、58年(翁)、59年に(道成寺)を披く。平成14年、九世鏡之丞を襲名。東京関西を中心に全国的に活躍するほか、新作能の試みや海外公演等にも積極的に参加。日本能楽会会員。社団法人鏡仙会理事長。都立国際高校非常勤講師。京都造形芸術大学評議員。法政大学大学院システムデザイン研究科客員教授。

◎春の褒章 旭日小綬章

大鼓方高安流 安福建雄

◎重要無形文化財保持者各個認定(人間国宝)

笛方一噌流 一噌仙幸

認定理由…高度な演奏技法を体得し、「三老女物」をはじめとする最高の秘曲・大曲をたびたび勤め、その演奏成果は恩賜賞・日本芸術院賞や紫綬褒章を受けるなど高い評価を得ている。社団法人日本能楽会の理事に就任し、また国立能楽堂能楽三役(養成研修講師を勤めるなど、斯界の振興及び伝承者の養成に尽力して)おり、広く能楽界においてかけがえのない存在となっている。

一噌氏は昭和15年一噌正之助の次男として生まれ、昭和29年より藤田大五郎に師事。(俊成忠度)で初舞台。37年に(道成寺)を披く。平成3〜9年、能楽協会理事。平成8年観世寿夫記念法政大学能楽賞、20年日本芸術院賞・恩賜賞を受賞。同年紫綬褒章受章。

◎文化功労者(10月27日付)

シテ方観世流 片山九郎右衛門

片山氏は昭和5年、八世片山九郎右衛門(博通)、四世井上八千代(片山愛子)の長男として京都に生まれ、観世華雪・雅雪に師事。11年に仕舞(猩々)で初舞台。14年(岩舟)で初シテ。27年に(道成寺)を披く。以後、(姨捨)(鸚鵡小町)(檜垣)(関寺小町)等、最奥の秘曲に至るまで、数多くの舞台を勤める傍ら、京都観世会会長、京都能楽会理事長、能楽協合理事長等の要職を歴任。平成2年日本芸術院賞、6年紫綬褒章。7年芸術院会員、13年重要無形文化財各個指定(人間国宝)。21年、観世宗家より雪号「幽雪」および「老分」の称号授与。10月には京都市特別功労賞も受賞されている。

◎秋の褒章 旭日双光章

笛方森田流 寺井久八郎

日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会

【役員構成】

《会長》野村四郎

《常務理事》観世清和・金春安明・高橋章・金剛永謙・宝生閑・柿原崇志・山本東次郎・野村万作

《理事》浅見真州・梅若吉之丞・梅若六郎・亀井保雄・豊嶋三千春・喜多六平太・粟谷能夫・高安勝久・杉市和・観世新九郎・山本孝・金春惣右衛門・茂山千五郎

《監事》高橋汎・佐野萌

【会員数】(平成21年度)総数 481名

シテ 観世 203 金春 17 宝生 52 金剛 13 喜多 25 小計 310
ワキ 高安 4 福王 6 宝生 9 小計 19
笛 一噌 7 森田 21 藤田 2 小計 30

小鼓 幸 13 幸清 8 大倉 8 観世 2 小計 31
大鼓 葛野 7 高安 8 石井 6 大倉 8 観世 1 小計 30
太鼓 観世 7 金春 11 小計 18
狂言 大蔵 27 和泉 16 小計 43

◎能楽協会(=会員名簿)平成21年版(二〇〇九)より)

【役員構成】

《理事長》野村萬

《常務理事》武田志房・本田光洋・香川靖嗣・安福建雄・福王茂十郎

《理事》浅井文義・石黒孝・上田貴弘・大江又三郎・大倉源次郎・観世元伯・関根祥人・高安勝久・武田宗和・辰巳満次郎・前田晴啓・松野恭憲・山本則俊・吉野晴夫
《幹事》秋元実・大塚和成・中田ちず子

【会員数】1398名

シテ 観世 497 金春 118 宝生 244 金剛 84 喜多 46 小計 989
ワキ 高安 12 福王 19 宝生 25 小計 56
笛 一噌 14 森田 46 藤田 4 小計 64
小鼓 幸 30 幸清 11 大倉 20 観世 6 小計 67
大鼓 葛野 12 高安 12 石井 10 大倉 11 観世 1 小計 46
太鼓 観世 16 金春 24 小計 40

狂言 大蔵85 和泉51 小計136
支部分 東京639名・名古屋113名・北陸85名・京都159名・大阪183名・神戸56名・九州114名・本部扱49名

物 故 者

● 浦田保利

観世流シテ方。4月23日、心不全のため逝去。享年79。昭和4年、浦田保嗣の長男として京都に生まれる。父及び二十五世観世左近、片山博通に師事。8年に仕舞(春栄)で初舞台。初シテは15年(花月)。30年に(道成寺)を披く。平成5年(嬢捨)、10年(関寺小町)をはじめ、多くの大曲を勤めた。昭和46年の日本能楽団ヨーロッパ公演に参加。以後も旧ソ連、イラン、中国等、多くの国での公演をおこなった。大阪文化祭賞本賞(昭和61・平成2・同8年)、京都府文化賞功労賞(平成11年)、大阪府文化祭賞金賞(同12年)を受賞。京都観世会副会長、日本能楽会理事、京都観世会館専務理事等を歴任。

● 柳原富司忠

幸清流小鼓方。5月31日、くも膜下出血のため逝去。享年62。昭和21年岐阜市生まれ。名古屋大学在学時より能楽サークルで福井啓次郎に師事。卒業後玄人の道に入り、(道成寺)(石橋)(卒都婆小町)(嬢捨)等を披く。日本能楽会会員。国立能楽堂「能楽三役養成事業」講師、能楽協会名古屋支部副支部長、名古屋市文化振興事業団評議員等を歴任。

● 三島卓

金春流太鼓方。6月6日、急性肝不全のため逝去。享年36。昭和47年、三島元太郎の長男として大阪に生まれる。6歳で初舞台。9歳で初能(狸々)。平成2年に(石橋)11年に(道成寺)を披く。東京・大阪を中心に全国で舞台を勤めるとともに、子供や学生への太鼓指導、能以外の楽器とのジョイント公演等にも熱心に取り組んだ。オーストラリア、エジプト、ヨーロッパ等海外公演にも多数参加。

● 藤波重満

観世流シテ方。7月27日、脳血管障害のため逝去。享年77。昭和7年、藤波順三郎(紫雪)の三男として東京に生まれる。父及び二十五世観世左近に師事。初舞台は(鞍馬天狗)の花見。37年に(道成寺)を披く。平成7年(卒都婆小町)、8年(鸚鵡小町)、10年(定家)、14年(鶯)をはじめ、多くの大曲を勤めた。日本能楽会会員。観世会理事、同常務理事、能楽協会常務理事、観世会監事、観世文庫評議委員等の要職を歴任したほか、東京芸術大学では37年にわたって後進の育成に尽力し、平成11年より同大学名誉教授となった。昭和43年日本政府派遣文化使節団の一員として行ったアメリカ・メキシコ公演をはじめ、フランス、インド等の海外公演にも参加。

● 佐野萌

宝生流シテ方。9月28日、心不全のため逝去。享年81。昭和3年、佐野巖の長男として東京に生まれる。宝生重英、宝生英雄に師事。11年に(百万)の子方で初舞台。31年に(石橋連獅子)、34年に(道成寺)(乱)を披く。平成10年の(卒都婆小

町)、17年の(嬢捨)をはじめ、多くの大曲を勤めた。日本能楽会幹事、宝生会常務理事など要職を歴任したほか、東京芸術大学でも長く教鞭を執り、名誉教授となった。

●伊藤正義

能楽研究者。大阪市立大学名誉教授。神戸女子大学名誉教授。12月2日、肺癌のため逝去。享年79。昭和5年神戸市に生まれる。29年京都大学文学部文学科(国語国文学専攻)卒業。35年同大学院博士課程修了。松蔭短期大学、松蔭女子学院大学、関西大学を経て、昭和48年より平成4年まで大阪市立大学、平成4年より16年まで神戸女子大学にて教鞭を執る。

「六麓会」「神戸古典研究会」等で、多くの若手研究者や大学院生を育てた。大阪能楽鑑賞会の企画や廃曲の復活上演への協力など、能楽界への貢献も大きい。昭和63年観世寿夫記念法政大学能楽賞、平成15年兵庫県文化賞受賞。主な著書に、『金春古伝書集成』表章共編(わんや書店 昭和44年)、『金春禅竹の研究』(赤尾照文堂 昭和45年)、『謡曲集上・中・下』(新潮日本古典集成 昭和58～63年)、『版本番外謡曲集一～三』(臨川書店 平成2年)、『花伝諸本対観』(和泉書院 平成20年)等。

●金井清光

能楽研究者。時衆研究者。鳥取大学名誉教授。文学博士。4月7日逝去。享年86。大正11年長野県松本市に生まれる。昭和18年東京帝国大学文学部国文学科に入学。学徒出陣・シベリア抑留の後、27年東京大学国文学科卒業。32年同大学院

満期退学。同年より鳥取大学文学部(のち教育学部)で教鞭を執り、同大学教授を経て、59年より平成7年まで、清泉女子大学文学部教授。能楽に関する主な著書に『能の研究』(桜楓社 昭和44年)、『能と狂言』(明治書院 昭和52年)、『風姿花伝詳解』(明治書院 昭和58年)等がある。その他時衆文芸に関する著書も多数。